

3 「コミュニティ・ミュージック」という 視点からみる音楽活動

1 コミュニティ・ミュージックとは？

「コミュニティ」ということばについて、広辞苑では「一定の地域に移住し、共属感情を持つ人々の集団。地域社会。共同体」と説明しています。一方で、「Community」を英和辞典で検索すると、「(利害・宗教・国籍・文化などを共有する) 共同社会、共同体、コミュニティ：地域社会」「(大きな社会の中で共通の特徴を持つ) 集団、社会、～界」「(利害などを共有する) 国家群」「(財産などの) 共有、共用：(思想・利害などの) 共通性、一致」(研究社『新英和中辞典』)というように出てきます。日本語のカタカナ読みの「コミュニティ」より、広い意味を含んでいることが分かります。さらに、最近では「ヴァーチャル・コミュニティ」や「オンライン・コミュニティ」と呼ばれるインターネット上で形成される、地理的な制約を超えたコミュニティも数多く生まれています。このようなコミュニティの概念とその広がりの中で営まれる音楽(活動)について、世界音楽教育協会(ISME)のコミュニティ・ミュージック・コミッション(CMA)は、次のように説明しています。

「あらゆる人々を受け入れて、公平に接し、歓待することを基本として、それを音楽活動の中で実現していくこと……特に社会的に疎外されたコミュニティが、自らの芸術的、社会的、政治的、文化的な関心に基づいた、本物の音楽活動に従事できるように、文化的かつ心理的に安全な場面を提供することである。」(ISME/CMA ウェブサイト, 2024)

全ての人々が自分自身の納得できる音楽を奏で、つくり、楽しむ権利を守り、彼らの音楽能力

を最大限に伸ばしていくことを目的とした音楽活動がコミュニティ・ミュージックであり、その特徴は、人々の能動的な音楽活動を奨励し、支援することであるとCMAは定義しています。その背景にあるのが、米国や英国において発展してきた、コミュニティ・ミュージックについての考え方です。

2 米国と英国にみる コミュニティ・ミュージック

米国では南北戦争後、移民や奴隷として連れてこられた人々、原住民と呼ばれている人々の音楽についての研究が進みました。社会の中で共通の特徴を持つ小集団、即ちヨーロッパの伝統的な芸術音楽という多数派の音楽に対する、少数派の音楽への注目が、コミュニティ・ミュージックという概念を生み出しました(Bush and Krikun, 2013)。

20世紀初頭のアメリカでは、第一次世界大戦後の社会の士気を高め、復興を支えるための表現活動の一環として、コミュニティ・ミュージック活動が奨励されました。地域における合唱活動の普及と、指導者育成に努めたピーター・W・ダイケマはコミュニティ・ミュージックについて次のように述べています。

「コミュニティ・ミュージックはある特別な種類の音楽や、演奏家を示す言葉ではない…社会化された音楽のことであり、リンカーンの言葉を借りれば、人々のための、人々の、人々による、音楽のことである」(Dykema, 1916, p.218)

このような考え方にに基づき、米国では人々が集まって行、様々な音楽ジャンルや様式、演奏形態を包含する、インフォーマル、ノンフォーマル

な音楽活動を総称して、コミュニティ・ミュージックと呼んでいます。

一方英国では、労働者階級が住むエジンバラのクレイグミラー地区で、1962年にヘレン・クラミーが始めたある運動が、コミュニティ・ミュージックが生まれる発端になったといわれています。当時この地域の小学校では音楽が教えられておらず、子どもに音楽教育を受けさせたかった彼女は、賛同する母親たちと共に、地域の音楽を教えることのできる人材を探しました。このコミュニティ音楽家とのコラボレーションによる音楽教育活動は、地域の人々の賛同を得て、クレイグミラー・アーツ・フェスティバルへと発展していきました。

そこでは音楽やアートを通して、地域が抱える問題や課題が表現・提起されるかたちで、様々なオリジナル作品が上演され、高い評価を受けるようになりました(Dean and Mullen, 2013)。英国ではこのような歴史的背景から、プロのコミュニティ音楽家が音楽ファシリテータとして、様々な社会的背景を持つ人々の中に介入して、音楽的成果と共に文化的・社会的な目標達成を目指して音楽活動を推進していくことを、コミュニティ・ミュージックと呼ぶようになりました(Everitt, 1997)。コミュニティ音楽家は明確な目的を掲げて競争的資金を獲得し、資金提供者の趣旨に沿って、対象となるコミュニティと共に音楽プロジェクトを展開します。

3 コミュニティ・ミュージックについての考え方

ヒギンズはコミュニティ・ミュージックを、コミュニティの音楽、コミュニティが共同で参加する音楽活動、そして音楽ファシリテータが介入して参加者と積極的に関わる音楽活動、の3つに分類しています(Higgins, 2012)¹⁾。英国におけるコミュニティ・ミュージックを代表する3つ目については、音楽ファシリテータ同士のコラボレーション、アシスタントやホールスタッフ、音響技

術者を含めた、複数のファシリテータによるものも数多く存在します。

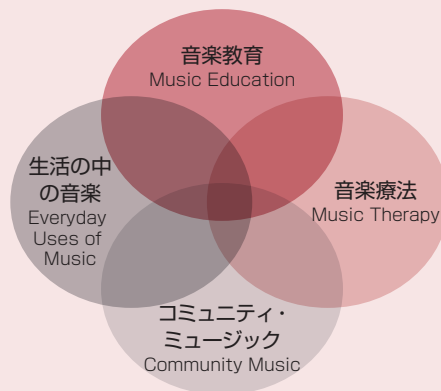
ベブレンは、コミュニティ・ミュージックの要素について、音楽・音楽活動の種類、意図、参加者、ファシリテーション、コンテキストの5つを挙げ、その在り方を提示しています(Veblen, 2004)。まず、共有される音楽は参加者が合意する全てのものを含み、演奏・即興・創作など幅広い音楽活動が推進されることです。次に、音楽的成果と共に参加者全員の社会的・個人的な健康とウェル・ビーイング²⁾を目指して、参加者中心の音楽活動が営まれることです。第3に、参加者については、社会的な難しさを抱えて不利な立場にいる人々をまず優先して受け入れた上で、全ての人々が対象となります。第4は、音楽ファシリテータの支援のもと、参加者による音楽活動への積極的な参加と、自らの役割を遂行するためのアクティブ・ラーニングが求められることです。最後に、音楽活動を営むコミュニティについては、地理的条件、文化的背景、芸術的志向などにより形成されるだけでなく、再形成されたもの、ヴァーチャル、あるいは想像上のものも含めて、広義にとらえる必要があることです。

コミュニティ・ミュージックは、そこに集まっている全ての人々が、音楽を奏でつくりだすプロセスと、その音楽的成果の共同所有権を持つ、営利主義や競争原理に基づかない、参加者中心の音楽活動といえることができます。

4 コミュニティ・ミュージックと健康、ウェル・ビーイング

コミュニティ・ミュージックは、人々の健康(パブリック・ヘルス)と幸福(ウェル・ビーイング)の追求とその維持を目指す、コミュニティ音楽療法と多くの共通点があることが指摘されています(Stige and Aarø, 2012)。マクドナルド他は、そこに音楽教育と生活の中の音楽を関わらせることによって、音楽が社会や個人の健康とウェル・ビーイングに貢献する図式を提供しています

〈図1〉音楽、健康、ウェル・ビーイング
概念の枠組み



MacDonald, Kreutz, and Mitchell (2012), p.8.

(図1)。

リフは健康とウェル・ビーイングの心理尺度として、自立性、環境・生活におけるコントロール、個人的成長、人との肯定的な関係、人生の目的・意味、自己受容と自己肯定、の6つを挙げています (Ryff, 1989)。セリグマンによるウェル・ビーイング PERMA モデルは、肯定的な感情、関心・関与、人間関係、意義、成し遂げること、の5つのポイントを挙げています (Seligman, 2011)。

コミュニティ・ミュージックは、参加者が音楽コミュニティに支えられながら、自分にとって意味のある音楽経験をすることで、生活に潤いと楽しみを見出していくことを意図して営まれます。音楽ファシリテータは、音楽のリーダーシップと共に、参加者が活動の中で一人も取り残されないように、そして参加者同士がコミュニティ意識を持って活動できるように、環境を整えていく重要な役割を担っています。

5 音楽ファシリテータの役割

旺文社の『英和中辞典』によると、ファシリテート Facilitate は「…を容易にする、…を促進する、助長する、人の仕事などを助ける」と訳されています。ファシリテータは目標達成を手伝う世

話役や進行役を務める人です³⁾。ベズによると、ファシリテータはグループのメンバーが目標を達成するための、課題解決の手段を提供する役割を担っています。その場で何が起きているかを観察し、活動の目的をメンバーに明確に示して、彼らが相互に関わって課題解決するために有効なルールを保証します。そこで起きていることの進み具合を把握し、メンバーに活動の筋道を提供します。これらのことを、グループの決定権を侵害しないで遂行するのがファシリテータの仕事です (Bens, 2018)。

コミュニティ・ミュージックにおける音楽ファシリテータは、参加者と音楽の間に介入して、参加者が音楽活動に喜びを感じ、音楽をより楽しめるように支援します。そして、参加者と参加者の間に音楽で介入して、音楽コミュニティのメンバー同士の絆を強める手助けをします。さらに、参加者一人一人の音楽表現に働きかけて、その個性や能力を引き出し、グループの中でその力が最大限に活かされるように算段します。また、参加者間で何か問題が生じたときは、そこに介入して解決の手段を提供します。

コミュニティ・ミュージックの社会的側面が音楽的側面よりも強調されると、音楽的成果が期待外れになることもあります。競争的資金を獲得して活動する際には、活動成果の公的な発表が義務づけられることも少なくありません。音楽ファシリテータには、良質のパフォーマンスや公演という目標達成へ、モチベーションを高めながら参加者を導いていく、音楽プロデューサーとしての手腕も大きく問われます。

6 まとめにかえて

音楽的成果はもとより、参加者の社会的・個人的な健康とウェル・ビーイングという目標を掲げて、音楽活動を推進していくコミュニティ・ミュージックについては、音楽ワークショップと同義、あるいは音楽教育の1つのかたちとしてとらえられることもあります。コミュニティ音楽療

法の別称, さらには民族・民俗音楽の立場から全ての音楽をそこに含ませるなど, 様々な解釈がなされてきました。日本においてコミュニティ・ミュージック活動を推進している音楽家の多くは, 英国のコミュニティ音楽家とは異なり, コミュニティ音楽家としてのアイデンティティは持たずに, 音楽ファシリテーションの仕事に従事しています。コミュニティ・ミュージックというコンセプトが一般的に広がっていけば, 音楽家同士の交流やコラボレーションも盛んになり, 人と社会の健康とウェル・ビーイングをめざした, より多様な人々を対象とする, 様々なジャンルの音楽活動が推進されるようになると思います。

- 1) Music of a Community, Communal Music Making, An Active Intervention between a Music Leader or Facilitator and Participants の翻訳。
- 2) 幸せで満たされた状態であること。
- 3) <https://eow.ale.co.jp/search?q=facilitator>, 2024年9月10日参照。

【参考文献】

- 塩原麻里「アメリカ合衆国と英国におけるコミュニティ音楽についての考察：音楽教育との関連を踏まえて」『国立音楽大学研究紀要』, No.52, 2018年, pp.107-117.
- Bush, J.E. and Krikun, A. (2013), "Community Music in North America: Historical Perspectives", pp.13-24, in Veblen, et al (2013).
- Bens, I. (2018), *Facilitating with Ease! (eBook)*, Hoboken, New Jersey: John Wiley & Sons.
- Dean, K. & Mullen, P. (2013), "Community Music in the United Kingdom", pp.25-40 in Veblen, et al (2013).
- Dykema, P.W. (1916), "The Spread of the Community Music Idea", *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 67, pp.218-223.
- Everitt, A. (1997), *Joining in: An investigation into participatory music*, London: Calouste Gulbenkian Foundation.
- Higgins, L. (2012), *Community Music in Theory and Practice*, Oxford: Oxford University Press.
- MacDonald, R., Kreutz, G., and Mitchell, L. (2012), "What is Music, Health, and Wellbeing and Why is it Important?" in MacDonald, R., Kreutz, G., and Mitchell, L. (ed.), *Music, Health, & Wellbeing*, New York: Oxford University Press, pp.3-11.
- Ryff, C. D. (1989), "Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being", *Journal of Personality and Social Psychology*, 57 (6),

pp.1069-1081.

- Seligman, M. E. P. (2011), *Flourish: A visionary new understanding of happiness and well-being*, New York: Free Press.
- Stige, B. and Aaro, L. E. (2012), *Invitation to Community Music Therapy*, New York and London: Routledge Taylor & Francis Group.
- Veblen, K. K. (2004), "The Many Ways of Community Music," *International Journal of Community Music*, 1, pp.8-16.
- Veblen, K.K., Messenger, S.J., Silverman, M. and Elliott, D. (ed.) (2013), *Community Music Today*, Lanham: Rowman & Littlefield Education.
- ISME/CMA ウェブサイト
<https://www.isme.org/our-work/commissions/community-music-activity-commission-cma>, 2024年9月10日参照。
 (塩原麻里)